

仏教タントリストの飲食による成就

静 春 樹

はじめに

これまでの筆者の研究は、主にタントリストたちの集団的修法に視点を合わせて無上瑜伽階梯に属する文献を見ることであった。こうしたインド密教文献で気になることは、平たく言えば成就の「大盤振る舞い」である。インド仏教はその長い歴史の中で、宗教的最終目標が様々に変化してきた（解脱・無余涅槃・無住処涅槃など）。仏教の教相上の変移は、そのまま最終目標の変移でもある。7世紀の半ばより、インド密教に新しい動きが始まる。所謂「雑密」と認められる初期密教の現世利益中心の修法から、修行者が仏そのものとなるための手段としての瑜伽観法が中心とされるようになる。それは七世紀後半に成立したとされる『真実撰経』(Tattvasaṃgraha『初会金剛頂経』)に定式化された「五相現等覚次第」で、一応の完成に達したかに見える。後世の研究によれば、瑜伽タントラ階梯が定式化した成就の公式とは、修行者が自らの大印・三昧耶印・法印・羯磨印の四印を曼荼羅の本尊のそれらと同化させる「一尊瑜伽」の方式で本尊と一体になる、つまり自身に本尊が入り、自身が本尊に入って両者が一体となることによる「即身成仏」である。しかしインド密教はこの地点で無数の仏陀を輩出して、瑜伽タントラ段階で思想的展開を停止したわけでは決してなかった。インド密教はさらに「竿頭一步を進める」のである。観念世界での徹底を求めるインド的思惟が、『真実撰経』が確立した「五相現等覚次第」の論理を突破口にしてさらに無上瑜伽階梯に進んだということは、彼らにとって瑜伽タントラ階梯の密教は未了義を意味するのである。事実インド密教のその後の展開を知る者にとっては、『真実撰経』は「金剛乘」の成立宣言であって、仏教タントリズムへの大道を開いた通過地点にある門に過ぎない。この過程は教理的には、「真実在」を四印の全体的な働きとする瑜伽階梯から、無上瑜伽階梯の大印契の成就を以て即身成仏とし、修法論としては本尊の大印契(色身)

を生身の瑜伽のパートナーに同置することとなる。このように『真実撰経』の瑜伽の理論を基礎にして「即身成仏」の理論を展開した仏教徒たちの内の一部のグループが修法のパートナーと修法の実践空間を求めて、アウトカーストの女性集団に近づいていく。こうして成立したのが仏教タントリズムの成立を宣言する Guhyasamājantra (以下『秘密集会』) であるとされている。しかし、奇妙なことに我々がこのタントラに見るものは、あの整合的な『真実撰経』の世界とはあまりにもかげ離れた乱雑な、一見、「雑密」的世界へ逆戻りしたかの如き現世利益獲得の手段、つまり増益・息災・敬愛・降伏法などが氾濫する呪法の世界である。もちろん『真実撰経』を書いた仏教徒たちもこうした「雑密」的な世界と無縁であったわけがない。そうした「雑密」的世界は人間存在の欲望を基礎に置いたあり方と不可分に結びついて常に存在するものである。ただ『真実撰経』の作者がそこに視点・焦点を合わせなかっただけのことである。他方で、無上瑜伽階梯の諸タントラが提供するものは、「五相現等覚次第」に定式化された瑜伽観法は当然のこととして、それも含めた雑多な手段による成就の「大盤振る舞い」なのである。以下に、仏教タントリズムの重要術語「五甘露」・「五灯明」にまとめられる実体を食することによる成就の保証を述べた『秘密集会』の偈頌を引用する。

悉地を果として求めようとする修行者は、糞尿を食とするための〔行を〕すれば、無上の真実である、無垢な菩提心を成就するであろう。肉を食とする等〔の行〕をなすためには、大肉を考慮に入れるべきである。一切の悉地の中でも、身語心の秘密を成就することになる。象肉、馬肉、犬肉、同じくすぐれた〔肉〕を、食事とするために食べるべし。その他のものを食べてはならない。〔そうすれば〕諸仏も、諸菩薩も、諸賢者も喜ぶ。実にこのような瑜伽〔行〕によって、〔修行者は〕速やかに仏の位を得ることになる(第六品21-3偈)。

文意は明瞭である。世間的に蔑視される動物の肉や人体の排泄物を口にする仏教徒は、その行為により単に下位たる「世間の悉地」が得られるのではなく、「一切の悉地の中でも、身語心の秘密を成就する」のであり、つまり仏位が獲得されるのである。そこで根本的な問題が生じる。無上瑜伽階梯の修法論が成立した地点とは、本尊の大印契を生身の瑜伽のパートナーに同置することによって、端的に言えば「性瑜伽」を成就の手段としたことによってである。それでは「性瑜伽」とは別な手段として挙げられている「飲食(口にすること)による成就」や『二儀軌』〈一

切集儀軌部品〉で言及される「舞踏による成就⁽¹⁾」と「性瑜伽による成就」との関係はどうなるのであろうか。

本稿ではこの問題を念頭に置きながら、インド密教が展開した集団的修法の中で「飲食による成就」を取り上げることにする。

第一章 「五甘露」・「五灯明」

人体の排泄物は言うまでもなく汚物であり、糞尿、経血などに対する性的倒錯を伴う愛好は、精神医学では「嗜糞尿狂」(coprolagnia)と名づけられている。仏教タントリストたちにとっては生涯に亘るsteadyな、あるいは修法期間だけの一時的なパートナーとの「正常な」性的関係はむしろ義務(三昧耶)であったことから、性的倒錯は論外として、人体の排泄物に対する特別な嗜好は、それまでのインド密教から仏教タントリズムを画する一つのメルクマールとなるものである。この点に限定すると、仏教タントリズムはまさしく現代精神病理学の研究材料となるものであろう。

インド密教が、正統派バラモンの社会通念からは唾棄すべきものとされる糞尿など人体の排泄物を口にする行為⁽²⁾を修法・行法に取り込む動きは『真実撰経』の積タントラから始まる⁽³⁾。こうした展開が極まって集約的な表現を見たのが、仏教タントリズムの「成立宣言」としての『秘密集会』である。その第五品には、「他人の財物に執着する者たち、常に愛欲に溺れる人たち、糞尿を食物とする人たち、これらの人たちは本当のところ、成就するに相応しい者たちである(5)」と宣揚されている。後期密教の全期間を通して権威をもって広く流通した『秘密集会』には、この他にも世間で貶められる不浄物の摂取を公言した以下の如き文言は数多い。

次いで一切如来の主である金剛手は、一切の金剛荼枳尼の三昧耶を、自己の身語心金剛より流出された。

糞尿と経血を食べ、常に酒などを飲み金剛荼枳尼との瑜伽に入り、住位の特徴によって殺生をなすべし。(ch.17 (24))

次いで一切如来の主である金剛手は、また一切諸仏の三昧耶を自己の身語心金剛より流出された。

糞・尿・精液・経血に対して、嫌悪すべきではない。儀軌に従って常にべきである。この秘密は三金剛より生じたものである。(ch.17 (47))

多くを挙げる必要を認めないが、無上瑜伽階梯の根本聖典と認められている『秘密集会』には、「汚言狂」(coprolalia)の文言に満ち充ちた文献と見られても仕方がない性格がある。

本論に入って、「五甘露」について見ていく。『秘密集会』では、第四品に「糞・尿・精液・経血などを諸尊に供養するべし⁽⁴⁾」とあり、Candrakīrti作Pradīpodyotana-nāma-tīkāはその箇所を、『糞尿』云々などについて、糞尿とは、五甘露である。大肉と言うのは五種の灯明であり、それら二つのものの部分を等しくして、黒月の八日あるいは十四日に丸薬を作って陰干しさせて⁽⁵⁾、(略)」と註釈している。

第十六章では「糞・尿・肉・脂および第五のもの⁽⁶⁾」とあって、「五甘露」の用語は見られないが、これらの実体が一組で挙げられていることが理解される。

五甘露については、『秘密集会』を嚆矢とする多くのタントラに見られるようにそれらの多くが人体からの排泄物を意味していることは確かであり、糞便・尿・経血・精液の四種は殆どの文献に共通している。残りの一つに脂や粘液を入れる場合がある一方で、大肉を入れる場合があり、そうすると次に述べる「五灯明」の大肉と重複することになる。確かに仏教タントリストたちの間で使用が義務づけられている符牒(sandhyābhāṣya)によって「五甘露」が明示的に何を指しているのかについては比定が困難である。以下にViravajra作Sarvatāntrasya nidāna-mahāguhyaśrisamputa-nāma-tantrarāja-tīkā-ratnamālā-nāmaとAbhayākara-guptaのĀmnāyamañjarīを引用する。

「瑜伽の儀軌を説く」とは、人間の身体に住する五甘露〔の説示〕である。かくの如く簡潔に示されているので詳しく釈して、catuḥsamaは大便の乳糜である。尿は薫香水である。梅檀は戦場で殺された者の血である。樟脳は精液である。salijaは大肉である。sihlaは自生の血である。kunduruは交会の符牒である。kakkolaは蓮華である。muguは髓である。「それらの薬は大であって」と言うのは人間の身体に存在する薬であるから「大」と言う符牒が付けられるのである⁽⁷⁾。

大血は汗である。樟脳は大肉、あるいは髓、あるいは脂、あるいは粘液である。赤梅檀は大便であって身体と心を広大に生起して異熟させるためと飲ばせるためである。金剛水は尿である。心より正しく生じたものは精液であって、『秘密集会の続タントラ』においても説かれており、「五つの垢は身体の諸存在において本来的に輝いている。五智によって加持されるが故に五甘露である⁽⁸⁾」

と言われる。三昧耶とは五甘露である⁽⁹⁾。

この五甘露と金剛界五仏の同置を明示的に説くのが後の節でも述べるMahāmudrātilakatantra (Toh 420以下『大印明点』)の第十二品である。

五甘露の儀軌の優れた略説を私は説こう。毘盧遮那・阿閼・不空成就・阿弥陀・宝生の五として示すべし。宝生は〔経〕血と説示される。無量光は精液と語られる。不空成就は大肉であり、阿閼は金剛水（尿）である。毘盧遮那は大香（糞便）であると釈説される。それ〔ら〕は五甘露である⁽¹⁰⁾。

仏教タントリストたちにとっての「三昧耶」の意味は独特⁽¹¹⁾である。瑜伽タントラ階梯までのインド密教にあって、「三昧耶」とは仏・如来の「本誓」を密教行者が自らの誓いとして自発的に受持することであり、自利利他の修行に邁進することを意味した。その「三昧耶」が無上瑜伽階梯にあっては、密教行者が必ず口にすべき飲食物として現れてくる。「三昧耶とは五甘露である」との定義は、瑜伽タントラ階梯までの三昧耶理解からは、決して展開も説明も出来ない。この点からも、『真実摂経』以後のインド密教者の間に何らかの地殻変動をもたらす動きがあったとしか考えられないのである。

さて、こうした人体からの排泄物や人肉である「五甘露」の摂取を具体的にどのように行うかについての詳しい記述がBhavyakirti作Pradipodyotanābhisaṃdhiprakāśikā-nāma-vyākhyāṭikāに見られる。

「五甘露」とは、糞便などの五つの実体である。「曼荼羅輪に献ずるべし」とは、その儀軌は以下であって、生まれたばかりの乳児の地面に落ちる前の糞便に瓦器 (śarāva) をあてがって入れて、七日の間、自らの願う尊格のマントラと金剛薩埵の百字を一緒に読誦し、陰干しにして、それから薫香を白檀と栴檀に混ぜ合わせてから〔塗り〕付けて、生起次第により毘盧遮那の姿として生起させて、それが仕上がってから再び真実の財物と意樂するべきである。それ（乳児の糞便）が無ければ自身から出た最後の三滴だけを取るべきであり、最初に出た粗い汚物は取るべきではないからである。それについての加持次第は先の通りである。薫香水（尿）もまた最後に出た三滴だけを阿閼の瑜伽で加持して取るのである。血もまた十二歳の娘の自生の花を取るべきであって、〔それが〕

無ければ左手の無名指から出たものを宝生の生起次第で加持して取るのである。菩提心もまた月が欠けた時に二根等至から出て地に落ちる前のものを螺貝の器で取って三金剛の瑜伽で加持するのである⁽¹²⁾。

このBhavyakirtiの意趣釈では、「五甘露」は、大便・小便・経血・精液と大肉であり、註釈はこのあと「大肉もまた『吉祥金剛甘露タントラ』の中で説かれている儀則⁽¹³⁾で取るべきであって」として瑜伽者が自己にヘールカ尊を生起して墓場に赴き「vetāla（起屍鬼）の法」で死人の肉をとる次第が説明されている。

タントラ文献においては、人体からの排泄物と並んで⁽¹⁴⁾、人肉を含めた五種類の動物の肉が「五灯明」の名で現れる。この用語については「五甘露」とは異なって具体的に何を指すかが明らかである。『秘密集会』第十二品には、「大肉・象肉・馬肉・犬肉・牛肉」が一組で挙げられている⁽¹⁵⁾。

「五灯明」の代表的な説明を『二儀軌』〈現證儀軌王品Vajragarbhbhāhisambodhi-nāma-prathamah〉およびそのVajragarbha作Hevajrapīṇḍārtha-ṭikāから以下に引用する。

儀礼においては、三昧耶である五灯明を注意深く食すべきである。〔それらは〕頭文字がna、頭文字がga、頭文字がha、終わりがśva、頭文字がśvaである。同様にヘーヴァージュラの〔三昧耶をもつ者は〕成就のために五甘露を食すべきである⁽¹⁶⁾。

それについて、「人間」の語の始めの文字はna、「牛」の語の始めの文字はga、haは「象」の語の最初の文字、śvaは「馬」の語の終わりの文字、同じくśvaは「犬」の語の最初の文字である。こうした材料を等同にして、親指の関節大ほどの丸薬を作って、清浄と為し混合し、火を煽って甘露と為してことで外の悉地となるのであり⁽¹⁷⁾、（略）

註釈書では、五種類の肉は材料であって、それから作られた丸薬は浄化され、甘露となるための儀礼を経なければならず、そうして甘露となったものを食しても獲得されるのは「外の悉地」である点がタントラ作者と註釈家との落差を示している。

同様の内容が『二儀軌』〈飲食品〉を註釈したBhavabhadra作Śrihevajravākyāhyāvivarāṇaで述べられている。

説かれている食物は「三昧耶」云々と言うのであって三昧耶は五つであり、〔それらは〕牛・犬・象・馬・人間である。「王の米」とは、人〔肉〕の三昧耶であり、「王の米」と「骨生」というのは同義語である⁽¹⁸⁾。

無上瑜伽階梯に特有な「三昧耶」の用法がここにも見られる。牛・犬・象・馬・人間 (go-ku-da-ha-na) の五種類の肉、彼らの符牒で「五灯明」は、仏教タントリストが摂取しなければならない「五種三昧耶」である。「五灯明」は別名「五鉤」とも呼ばれてタントラに出てくる。Saṃvarodayatantra第十六品〈五甘露の成就を明示する次第〉には、次のようにある。

肉や脂と同様に血を智者は受持するべし。悉地を願う修行者は五鉤であれば何であれ獲得することや、この場では秘密が第一事と説かれているので、もし首尾よく手に入れたならば〔密かに〕受持するべし。牛肉と馬肉と象肉、また同様に人肉と犬肉を智者は受持するべし。金剛薩埵がお説きになった〔それらは〕五灯明と称される。獲得してから〔黒〕月の十日にこうした物品を正しく集めるべし。香味と混ぜ合わせてよく秘密裡に準備するべし。修行者は秘密裡に丸薬の形に正しく作るべし。その直後によくとのった特別な食物と飲み物によって、聚会の中央で加持してその後で〔飲食の〕行為を正しく開始すべし。マントラ読誦と同じく禅定〔により〕願うところのすべての果が生じて、身体のrasāyanaと最勝解脱の悉地が与えられる。諸々の行為のすべてによく相応すれば虚空行の位が獲得されよう⁽¹⁹⁾。

先に見た『大印明点』では、「五甘露」が金剛界五仏と同置されていた。それは異なって、こうした五種類の肉が特別に意味づけられて金剛界五仏と同置されることで五真実とされている例であるŚricatuḥpiṭha-mahayogītantrarāja (Toh 428 以下『四座』) 第二品 (parapiṭha) 第三節〈曼荼羅供養〉の一部とその註釈 Kalyāṇavarman作Āryacaturpiṭhatikāを以下に引用する。

次に供養の特別な行為とは、相応しいものと相応しくない〔という妄分別〕を離れ、鉤など五種類を五真実となして、大鉤として建立されたものは、智慧の尊格と称される。金剛鉤として阿閼、位の鉤には宝の自在者、王の鉤として不空成就、動く鉤として無量光である。五鉤などについては、すべての真実を結

合するべし⁽²⁰⁾。

「大鉤というのは」とは、人間の肉である。「五智の」とは、五智を自性に願う意味である。「金剛鉤は動揺しない者」とは、象の肉である。阿閼を自性とするのである。「母の鉤⁽²¹⁾は宝生」とは、犬の肉であり、宝生を自性とするのである。「勝者の鉤は不空」とは牛の肉であり、不空成就を自性とする。「動く鉤は無量光」とは馬の肉であり、無量光を自性とする。「五鉤などのすべてを真実と正しく結びつける」とは、そのうちの「すべての真実」とは涅槃であり、「それを結びつける」とは、縁という意味である。それらはまた毘盧遮那と阿閼と宝生と無量光と不空成就を自性とすると言われて、「凡そ誰であっても願う尊格のすべて」と言うのであり、五仏を自性とするが故に願望が成就するのである⁽²²⁾。

タントラおよび註釈書では、「五灯明」、つまり五種類の肉が金剛界五仏と同置されているが、少し異なった解釈が『サンヴァラ広釈句義明』に見られる。ここでは「五灯明」だけではなく、「五甘露」と「五灯明」が混ぜ合わされて出来た実体に、金剛界五仏との瑜伽をした阿闍梨が加持をして、五感官の対象を象徴させた「五金剛女」の内の「味金剛女」(Rasavajrā)として生起させる。作者のViravajraがŚri-Laghusaṃvara (Toh 368以下『チャクラサンヴァラ』)の註釈に『秘密集会』系統の「金剛女」を出しているのが注目される。

最初の一つの器に食物と聚輪に必須な資財と蘇息つまり菩提心（精液）、中間〔の器〕には自生の血、最勝なる〔器には〕大血と薫香つまり大便と最初の水つまり尿であって、〔それら〕と一緒にするものは馬と象と犬と牛と人間の肉つまり五〔灯明〕である。それをOm・Āḥ・Hūṃの三文字で加持して後、〔金剛界の〕五族を自性にもつが故に味金剛女（Rasavajrā）として生起するのである⁽²³⁾。

『秘密集会』で明確にその姿を見せる「五甘露」・「五灯明」は、インド密教の最後に現れたタントラである Paramādibuddhoddhṛtaśrikālacakra の註釈書 Vimalaprabhā-nāma-mūlatantrānusāriṇīdvādaśasāhasrikā-laghukālacakratantarājatikā (Toh1347以下Vimalaprabhā) においても聚輪と関連させて次のように説かれている。

かくの如く糞と尿と髓と五灯明は八つの三昧耶であり、月（精液）と太陽（経血）は二つの三昧耶である。このように十種類の供物である五甘露と五灯明によって聚輪となるのである。酒と肉と性交と甘露を口にするという四個一組が阿闍梨によって為されるべきである。さもなければ魔の軍勢に捕らえられるというのが如来の説示である⁽²⁴⁾。

Vimalaprabhāが説くように聚輪とは、「酒と肉と性交と甘露を口にするという四個一組」となった修法であり、「五甘露」・「五灯明」はその不可欠な資財なのである。しかしこうした引用例はまさしく九牛の一毛に過ぎないものであって、無上瑜伽階梯の文献の中では、仏教徒の集団的な修法の場に現れる「五甘露」・「五灯明」の用例は枚挙にいとまがない。

ところがタントラの註釈書に現れる聚輪とは違って、「聚輪儀軌」といった儀礼マニュアルにおいて見られるのは、仏教徒たちの集会が依然と黒魔術的な要素をもつ秘儀的修法ではあっても、同時に祝祭的な要素を強めていることである。多くの聚輪儀礼マニュアルにおいては、聚輪を「布施」する施主が準備する飲食物は、口にして「本当に美味しい」品々である。例えばDombi-heruka作gaṇacakravidhiでは、「客人（会衆である瑜伽者と瑜伽女）たちを喜ばせるために、集会で肉と酒と乾飯と麵餅と餅子と、同様に主食と副食品と飲物と乳酪など」が施主によって用意される⁽²⁵⁾。ネパールの阿闍梨Kuladattaが作成し、その地で広く行われた儀礼集成書Kriyāsaṃgraha (Toh 2531) 中の「聚輪儀軌」においては、「各種調味料・米飯・バター・スープ・様々な魚と肉・ペストリー・蒸しパン・揚げパン・酒・水・菟醬・各種果物」（桜井2001:27）が提供される。Vajrāvaliと構成が類似したĀcār yakriyāsamuccayaの「聚輪儀軌」も同様である⁽²⁶⁾。

Āmnāyamañjariでは、五甘露について古典的な註釈をしているAbhayākaraguptaは儀礼集成書Vajrāvali-nāma-maṇḍalavidhiのpratiṣṭhā儀礼の尊像供養で「五甘露」が用いられる場面を以下のように説明している。

その次に甘露軍拏利のマントラを読誦したガルバ草の束を用いて、銅器に入ったヨーグルト、牛乳、ギー、蜂蜜、黒砂糖が混ぜ合わさった外の五種の甘露をもって、次ぎに牛乳、ヨーグルト、ギー、牛糞、牛尿といった牛五淨 (pañcagavya) で尊像を沐浴し、〈Om hūṃ trāṃ hriḥ āḥ〉のマントラを読誦して〔尊像に〕塗るべし⁽²⁷⁾。

この場面で「五甘露」として挙げられている実体はヨーグルト・牛乳・ギー・蜂蜜・砂糖が混ぜ合わされたものである。この実体を指してAbhayākaraは「外の五種甘露」と呼んでいる。『秘密集会』が宣揚した教説に忠実であろうとすれば、三昧耶である「五甘露」は人体からの排泄物および人肉であるべきであって、乳製品や蜂蜜・砂糖であることは出来ない。Abhayākaraに見られる後世の阿闍梨たちはその齟齬を会通するために「内の五甘露」としての古典的な五種の実体に対して、「外の五甘露」のカテゴリーを案出したと考えられる。

さらにインド密教の阿闍梨たちは、この「内外」の落差をも観想によって、現実の飲食物に本来のあるべき「五甘露」を具現化する方途で無化する魔術師である。成就法によって例えば乳製品が「甘露」と為される。これはキリスト教で行われる聖餐(聖体)のSacramentoを考えて戴きたい。祭壇に置かれたパンと葡萄酒がイエス・キリストの肉と血に「聖変化」する如く、集会の中央に置かれた現実の乳製品に被さってくる「聖性」は本来の「五甘露」に表象される仏教タントリストの共同観念としての三昧耶なのである。ここに見られる「内外」の落差は丁度、成就法の構造を浮き彫りにする鏡の反射である。「西藏大蔵経」に『聚輪儀軌』、『聚輪供養儀軌』の名で単独テキストとなっている文献、あるいは曼荼羅儀軌に組み込まれたユニットとしての「聚輪儀軌」では、一部の例外を除き「五甘露」「五灯明」の記述がトーンダウンしている。このことはタントラに忠実な註釈と実際に行われた大衆的な祝祭の性格を帯びた集会マニュアルとの性格上の相違を示すものと考えられる。

第二章 「ソーマ飲料」(somapāna)

1 『サマーヨーガ』と「ソーマ飲料」

仏教タントリズムにおける成就をもたらす手段のひとつとしての「飲食による成就」の問題を瑜伽タントラの展開線上に形成された大瑜伽タントラに属するSarva-buddhaḍākinijālasaṃvaratantra (Toh 366以下『サマーヨーガ』)の第六品に見て行きたい。『サマーヨーガ』を選んだ理由は、同タントラがこの問題に関して、遡ってはParamādyamantrakalpakaḥṇḍa-nāma (Toh 488以下『理趣広経』「真言分」)に、下っては『チャクラサンヴァラ』系の諸タントラに共通した偈頌の文言を持って繋がるからである。

『サマーヨーガ』第六〈茶枳尼網曼荼羅の章品〉は、章品の名称どおり全体とし

ては曼荼羅儀礼であり、集団的な修法の説示を中心に置いた章品である。この章品では聚輪的な修法と灌頂儀礼の説示とが一連のプロセスとして説かれているのが特徴的である。重要な問題は、そこで述べられている灌頂儀礼の性格が何であるかを検討することである。本稿では「ソーマ飲料」の実体を探ることで同時に『サマーヨーガ』における灌頂儀礼の性格を明らかにしていく。さらに、この章品は『理趣広経』「真言分」二十三と深い関連を有する。そこで本節の主題に関して、両者に類似する文言がある場合は、『理趣広経』の当該箇所も引用することにする。

さて『サマーヨーガ』第六品では、先ず清浄なる地を選んで、曼荼羅地儀軌が為された後、「聚会曼荼羅をしつらえるべし」とあり、この段階で聖別された円輪に阿闍梨と女性たちが入ると考えられる。タントラはすぐそれに続いて、集会で参加者たちが口に作る品を記述していく。

人間の「朱」が成就したところで、「大赤」と説かれる。本性の威力によって、自然にそれが成就するのである。金剛水を金剛杵に伴って、成就された「大朱」を威力によってよく成就して、蓮華鉢（頭蓋鉢）の中に入れるべし。大貪欲の世尊である金剛薩埵、如来、一切諸仏の金剛心であるこの三昧耶を越えることは困難である。その「朱」と「白」と「大朱」を成就したものは大貪欲から生じたものであるから「大赤」と説かれる。「大赤」と樟腦と一緒に赤栴檀と混ぜ合わせたものにして聚会の中央に置かれたrasāyana（不死の靈薬）が等起する⁽²⁸⁾。自らの尊格との瑜伽をしている者が薬指と親指の先端でソーマ飲料の如くに味わうならば、常恒の悉地が得られる。一切諸仏を自性とするこのrasāyanaの薬によって〔修行者が〕金剛薩埵の寿命と若さ⁽²⁹⁾と無病の最勝樂が成就する⁽³⁰⁾。

このように「ソーマ飲料」(somapāna tib. zhi ba'i btung ba) に比される靈妙なるrasāyanaがつくられてから、金剛阿闍梨は本尊瑜伽に入り、金剛薩埵を自身に生起する。続いて金剛阿闍梨の指導の下で先の女性たちが「遍入されて金剛杵を伴う標幟を持った瑜伽女」となる。その女性たち四人が曼荼羅供養法を行ってから、灌頂の受者である弟子が引入される。四人の女性たちは男性瑜伽者と一緒になって、灌頂の受者である弟子たちを踊りで励まし、花を持たせ、彼らの顔を布で覆って投華させる。このプロセスは灌頂次第では一般に「弟子引入次第」と呼ばれるものであり、常の瓶灌頂と変わるところがない。『理趣広経』「真言分」の類似箇所を

引用する。

次にその場での弟子引入（śiṣyādhivāsanā）の詳しい儀則は、〔弟子に〕無上菩提心を最勝に生起させてから舞踏させ、頭頂で合掌して供養させ、弟子全員を〔曼荼羅に〕引入するべし。思い通りの悉地を生じるのであり、弟子に投華させて〔花が〕落ちた処の瑜伽女がそれぞれの〔弟子の〕女尊〔として〕成就する。次に〔阿闍梨は弟子の〕顔の覆いを解いてから、あらゆる種類の施物を受け取って、金剛蓮華の灌頂によって三昧耶（trisamaya）を明瞭に授与するべし⁽³¹⁾。

投華・曼荼羅拜見の後、『サマーヨーガ』では、先に説かれた「ソーマ飲料」（rasāyana）が再度登場する。このことは、「ソーマ飲料」が第六章のキーワードであることを如実に示すものである。

「大赤」と樟脳とを一緒にして赤梅檀と混ぜ合わせたものを聚会の中央に置いたところで、左の標幟をもつ金剛を伴い自らの尊格との瑜伽をしている者が無名指と親指の先端で「ソーマ飲料」の如くに味わうならば常恒の悉地を獲得するのである。一切仏と平等なる瑜伽のダーキニー網の集団もまた悩乱されず、暗まされず、そこにおいて損なわれることはない⁽³²⁾。

このように、阿闍梨灌頂の投華に引き続き行われる成就をもたらす所作は、「ソーマ飲料」にも比される「rasāyanaの摂取儀礼」なのである。この核となっている儀礼について、註釈書Pramūditavajra作Sarvabuddha-samayoga-dākinī-māyāsaṃvaravṛtti-samayogālaṃkāra-nāma（Toh 1660以下『平等和合莊嚴』）を引用する。

それをどのように享受するのかと言えば、「金剛水を金剛に伴って」と述べられていて、大香と香水と混ぜた菩提心と大朱であって、〔それに〕肉を混ぜ合わせた五甘露を自性とする威力を具えたものを頭蓋鉢に入れて、世尊・金剛薩埵の三昧耶である〔味〕金剛女について、幻の如くに證得するのである。それは一人の者によってではなく、瑜伽者の全員によって味わわれるべきである⁽³³⁾。ソーマ飲料の説示は「その朱と白と」と述べられていて、朱は自生の花（経血）

である。白は種子（精液）である。大朱の成就とは甘露の成就である。どうして五甘露の内「大朱」と特別の名前が付けられているのかと言えば、楽と空性を観想した大貪欲から生じるが故に、「大赤」と説かれるのである⁽³⁴⁾。

（そのような）菩提心と赤梅檀すなわち大肉とを混ぜ合わせたものが聚会の中央に置かれてから、すべての神々が味わう、死者を蘇生させるrasāyanaと言われるものとなる。どのようにして味わうのかと言えば、「自身の尊格と瑜伽した者」と述べられていて、聚輪の瑜伽者たちが各の尊格の瑜伽を為して、「薬指と親指の先端でソーマ飲料の如くに味わうならば、常恒に無漏の智慧成就が得られる」であろう⁽³⁵⁾。

かなり後世の著作と考えられ、『チャクラサンヴァラ』を熟知して『サマーヨーガ』を訳しているこの『平等和合莊嚴』においても、「ソーマ飲料」の実体、その成分は明示的ではない。経血（自生の花）、精液（種子、菩提心）、大肉（赤梅檀）は確定的であるが、大香が糞便、香水あるいは金剛水が尿を指すことは推定である。しかしどちらにしる「ソーマ飲料」の実体が「五甘露」の如きものであることは間違いない。またここでは「性瑜伽による成就」の系列にある秘密灌頂は説かれていない。繰り返すがこの場で行われるのは「ソーマ飲料（rasāyana）の摂取儀礼」であり、『平等和合莊嚴』によれば「〔味〕金剛女（Rasavajrā）について、幻の如くに證得する」のがこの儀礼の目的である。

その後、阿闍梨は弟子に誓言をさせて、『サマーヨーガ』に基づく三昧耶と「非勤苦性」堅持の律儀を与える。こうした過程を円満した「優秀な弟子はその後で、印契の智慧を随持して、最勝なる毘盧遮那の如くに一切諸仏によって自らが成就する⁽³⁶⁾」とあって、『真実撰経』における一切義成就菩薩と同じく、弟子はこの時点で現等覚したことになる。第六品はその後、集団的な飲食儀礼を説くが、これは正行に続く「付帯儀礼」に当たるものであって、この飲食儀礼とパラレルな箇所を『理趣広経』『真言分』に見る。

そこでrasā [yana] や食物や舞踏と歌の行為と音曲供養などで導師を供養するべし。その奉獻により金剛の大グルを〔満足させて〕、真心から自分と他の者たちを供養するべし⁽³⁷⁾。

飲食儀礼で参加者の全員が満足して、最後に六部族の変化した幻網による衆生済

度の方が説かれ、金剛薩埵の遊戯が説かれて第六品は終わる。

このように『サマーヨーガ』第六品の粗筋を見てきたが、そこには金剛阿闍梨が行う性瑜伽の含意は読み取れても、無上瑜伽階梯の灌頂次第には必ず見られる秘密灌頂・般若智慧灌頂の語句はおろか、そうした所作の片鱗も見られない。灌頂儀礼としてここにあるのは瑜伽タントラ階梯で既に確立している「投華得仏」儀礼のみである。ここで曼荼羅儀礼に組み込まれている特徴的な儀礼と見られるものは、「ソーマ飲料」と同義とされる成就をもたらす rasāyana の摂取なのである。しかしこの儀礼も以下のように、既に『理趣広経』「真言分」に見られるものである。

次に最勝瑜伽の三昧耶とは、大血と樟腦とを一緒にし、赤梅檀と混ぜ合わせたものを聚会の内によく置いて、金剛杵を持つ持金剛者が無名指と親指の尖端で一切の虚空を結び合わせた最勝を具えているもの (rasāyana) をソーマ飲料の如くに味わうならば常恒の悉地が獲得される。すべての欲するものを享受して欲しいままに依止しながら、一切虚空最勝の瑜伽によって一切の悉地が獲得されよう。「一切虚空最勝瑜伽によるが故に一切は虚空なり」と唱えて金剛印契で捺印された三世間をも食するべし。この悉地と同様にこの楽については、ほんの僅かでも成就しないことは決してない。羯摩の集合した悉地によって悉地は余すところ無く成就される。不空が最勝に成就し、難調なるもの一切を制圧し、一切の苦を奪う具吉祥なるこの瑜伽は一切の羯摩を為すとの最勝秘密が世尊金剛薩埵によって説かれたのである⁽³⁸⁾。

以上に検討した『サマーヨーガ』第六品と『理趣広経』「真言分」二十三とは儀礼次第として同質であり、瓶灌頂と聚輪的な集团的曼荼羅供養の一連のプロセスから構成されている点では同一の構造を持つ。率直に読む限りで、下のタントラと〈共通〉である瓶灌頂を終了した後で、それに引き続いて為されるべき無上瑜伽タントラにオリジナルな秘密・般若智慧灌頂を示唆する明確な記述はどこにも見あたらない。タントラの作者がこの秘密灌頂の記述を抜かしたとは考え難いことである。さらにもし、この『サマーヨーガ』第六品に、無上瑜伽階梯の秘密灌頂を見る論者がいるとすれば、その時には、同質の構成をもつ『理趣広経』「真言分」二十三にも秘密灌頂を見なければならなくなるであろう。『サマーヨーガ』第七〈一切曼荼羅の印契を知る章品〉は「曼荼羅行」を説く章品であるが、ここにも秘密灌頂は見られない。その他の品品では、第九品に「金剛名灌頂」の用語が見られるが、これ

は阿闍梨灌頂の一次第であり、瓶灌頂を出るものではない⁽³⁹⁾。

ところで、桜井(1996:175)は、「四灌頂」体系の内の「秘密灌頂」を論ずるに際し、『大口伝書』の記述から、性瑜伽の実践(「秘密供養」)が「密教の実践体系中の重要な要素として確立していたことが窺われる。従って遅くとも八世紀中頃には密教儀礼としての性的瑜伽が流布していたものと考えられる」と記している。

この桜井博士の記述によって、『理趣広経』から『サマーヨーガ』第六品が成立した時代に、「秘密供養」としての性瑜伽は広く行われていたとしても、瓶灌頂に接ぎ木される「四灌頂」体系の秘密灌頂次第は果たして成立していたかどうかの問題が提起される。成立していたとすれば、このような重要な儀軌次第が何故『サマーヨーガ』では説かれていないのかが次ぎに問題となる。

しかしこの問題は置くとして、本節で明確になったことは、『サマーヨーガ』第六品では、「ソーマ飲料」の摂取儀礼という「飲食による成就」の所作が聚輪的な集会と瓶灌頂次第で構成されるsequenceの核心に置かれていることである。

以下にこの『サマーヨーガ』に現れる「ソーマ飲料」(rasāyana)の内容についてさらに詳しく見ていくことにする。

2 「ソーマ飲料」の実体

集会の場で作られて口にされるものは〈rasāyana〉として出るが、文脈からすれば先ずそれは「ソーマ飲料」に比されているのであり、『サマーヨーガ』第六品では「ソーマ飲料」がまさしく核となる術語である。

そこでこの成就をもたらす飲物とされる「ソーマ飲料」について以下に詳しく検討していきたい。『サマーヨーガ』と類似の内容をもつ偈頌は『チャクラサンヴァラ』第一品においても見られる⁽⁴⁰⁾。

タントラ文献について、とくにチベット語訳しか残されていない偈頌の場合は、その明確な意味内容の把握にはかなりの困難が伴う。ところが『理趣広経』、『サマーヨーガ』および『チャクラサンヴァラ』における文意理解のキーワードである術語「ソーマ飲料」(tib. zhi ba'i btung ba)のサンスクリット〈somapāna〉を津田博士はAbhidāna-uttaratantra (Toh 369以下『Abhidāna続タントラ』)の中から早くに回収している⁽⁴¹⁾。この術語の後分pānaは動詞√pā〈飲む〉の派生語で〈飲物〉である。辻直四郎博士は『リグ・ヴェーダ』の中で⁽⁴²⁾、「ヴェーダ祭式の中心は、浄化した神酒ソーマを祭火に注いで諸神に捧げ、残余を祭官その他の参加者が飲むにあった。同名の植物の茎を石でたたき、压榨して得た液を羊毛の篩で濾

し、木槽に注ぎ入れ、適度に水を混じ、牛乳等を加えて造った一種の興奮飲料で、(中略) ソーマは神々、ことにインドラの愛好するところで、これによってその威力を増大し、人間はこれによって詩的靈感を得た」と記されている。ソーマは、回し飲みすることによって祭儀参加者にはエクスタシーが与えられたとされ、バラモン祭儀において中心的な役割を果たす飲物であるが、「インドにおいては早くから実物を入手することが困難となったらしく、代用物で満足し、今日植物学的にその本体を明らかにすることはできない」神話的飲料であると辻博士は述べている⁽⁴³⁾。

そしてこの「ソーマ飲料」と同義とされて新たに現れるキーワードがrasāyana(不死の靈薬)である。『サマーヨーガ』第六品に出るrasāyanaの説示は、第二品において⁽⁴⁴⁾、あるいは第九品において⁽⁴⁵⁾も見られる。

このrasāyanaはEliadeが『ヨーガ』のなかでタントリズムとハタ・ヨーガおよび錬金術に関して述べていることを想起させる⁽⁴⁶⁾。前節での引用が明示するように仏教徒たちの著した経典・儀軌では「ソーマ」がrasāyanaと同置されていることが理解できよう。

それではサンスクリット原文が回収できる『チャクラサンヴァラ』第一品と『Abhidāna続タントラ』第四十九品から、「ソーマ」の内実を検討していきたい。問題箇所は後者に出る以下の文言である⁽⁴⁷⁾。

madhurakṭam sakarpūram raktacandanayoḥjitam /
gaṇamādhye pratiṣṭham tu sarvocchiṣṭarasāyanam //

(中略)

somapāne vadāsvādya siddhim āpnoti śāśvatim /
pañcāmṛtam bhaved etat sarvasiddhipravartakam //

この偈頌での問題はraktaの語が二度見られることである。しかしmadhuraktaの後分であるrakta「赤」とraktacandanaの前分であるrakta「赤」とは、別の対象を指していると考えなければ、それらすべてを混ぜ合わせて成立するsomapānaは同タントラが続いて指示する同義語pañcāmṛta(五甘露)とはならない。チベット語訳では、

sbrang rtsi mtshal dang ga pur bcas // dmar dang tsandan sbyar ba
ni //

と前者を「朱」(mtshal)、後者を「赤」(dmal)と訳し分けている。

そこで『チャクラサンヴァラ』第一品の当該箇所を釈した註釈書の内から、符牒とそれが指す実体を説いている箇所のいくつかを取り出すことにしたい。これらの註釈書から、『サマーヨーガ』第六品に現れる「ソーマ飲料」と等値される「rasāyana 摂取儀礼」が『チャクラサンヴァラ』系に受け継がれていることが看取される。

Kambala-pāda 作 Sāadhananidāna-śricakrasaṃvara-nāma-pañjikā (以下『Kambalaサンヴァラ釈』)

「蜂蜜」は大蜂蜜である。「血」は〔自生の〕花である。「樟脳と一緒に」とは樟脳と一緒に存在する花(経血)であり不壊の次第によるのである。「赤梅檀」は肉である。「混ぜ合わせる」とは糞便などと一緒にして無比なる六〔味を具えた〕rasāyanaである。「金剛の標幟」は法源より生じたものである。あるいは「一切金剛」は世尊ヘルカであって、その標幟は頭蓋鉢である。「執持する」とはそこで自分の手で取るのであり無名指は大地に作り、親指はメール山として結び合わせるのである⁽⁴⁸⁾。

Bhavabhadra 作 Śricakrasaṃvarapañjikā-nāma (以下『Bhavabhadraサンヴァラ釈』)

(「など」の語によって、)五甘露を食べることと、聚輪においてソーマ飲料の如くに五甘露を味わうことと、二根の交会と⁽⁴⁹⁾、(後略)

「蜂蜜」と性質が同じであるから、蜂蜜は種子であり、正しく混ぜ合わせるると三過失を克服するが故に符牒となされたものであるからである。「血」はよく知られている。「樟脳」は楽によって励起するが故に樟脳であり、文字と口伝を喜んで為すから成就するのである。それはまた肉である。赤くするが故に「血」は薫香水である。梅檀は歓喜と為すが故に毘盧遮那(糞便)である⁽⁵⁰⁾。

Durjayacandra 作 Ratnagaṇa-nāma-pañjikā

「大血を樟脳と一緒にして赤梅檀と混ぜたものを聚会の内に置くならば一切がrasāyanaとして存在する」とは、「大血」は自生の花(経血)である。「樟脳と一緒に」とは菩提心と一緒にである。「赤梅檀」は大肉である⁽⁵¹⁾。

Bhavakirti 作 Śricakrasaṃvarapañjikā-sūramanojñā-nāma (以下『Bhava-

kīrtiサンヴァラ釈』)

「蜂蜜」は精液である。「朱」は血である。「樟脳と一緒に」とは大肉と一緒にである。「赤と」は尿である。「梅檀」とは糞便である。「聚会の内に」とは三輪の中央にである。「置く」とは喜んで受け取る〔所作〕とKoṅkanaの御前が意趣しておられる。Kambalaの御前は屍林における聚輪の中央で金剛種姓などの般若母と方便の交会によって置くべしと主張されるのである⁽⁵²⁾。

Devagupta作Śricakrasaṃvarasādhanasarvaśālā-nāma

「蜂蜜」は大油である。「血」とは花(経血)である。「樟脳と一緒に」とはこの樟脳と一緒に混ぜ合わされたものは花であって、順番としての区別はないからである。「赤と梅檀を混ぜ合わせたもの」について、赤と梅檀とは肉である。「混ぜ合わされたもの」とは、糞便などと一緒にして六味が最勝で無量なる甘露である⁽⁵³⁾。

Śāśvatavajra作Śritattvaviśadā-nāma-śrisaṃvaravṛtti (以下『Śāśvatavajraサンヴァラ註』)

「次にまた別のことを語ろう。外境の五甘露は美しい。蜂蜜と血と樟脳を一緒にして、赤梅檀と混ぜ合わされたもので、聚会の中央に正しく置かれたものは一切金剛〔羯摩金剛杵〕としての標幟〔頭蓋鉢〕を持つ」とは、五甘露を食する明示である。蜂蜜は髓である。血は塵である。樟脳は精液である。赤梅檀は糞便である。聚会の中央に置く〔もの〕は尿である⁽⁵⁴⁾。

「今は聚輪におけるソーマ飲料を詳しく述べる」とは、「無名指と親指の腹で瑜伽の明知により食すべし。ソーマ飲料の如くに味わう故に常恒の悉地が得られる」と清浄なる酒で導師に対し六〔味〕が生じるマントラで正しく満足させながら、〔次いで〕自身を満足させるべし。釈タントラにおいてもまた、「最初はグルに対して、直ぐ引き続いて諸仏〔に対して〕、その終わりに印契女に与えて、ソーマ飲料の如くに味わうべし」と言われる⁽⁵⁵⁾。

以上の引用からも明らかなように、また先の節で引用したAbhayākara GuptaのĀmnāyamañjarīも考慮に入れると、後期密教の阿闍梨たちにとって、符牒とそれが指す実体の関係は殆ど恣意的であると言ってよいものがある。しかしそれにもかかわらず、これらの註釈書で全体として挙げられている実体は「五甘露」を示して

いることから、「ソーマ飲料」の内実は仏教タントリズムが宣揚する三昧耶としての「五甘露」であるとして間違いはない。この点を『Bhavabhadraサンヴァラ釈』は次のように要約している。

蜂蜜などによって何が語られているかと言えば、「五」とは五種の甘露が一つにされたものが即ち五甘露である。尊格の瑜伽を具えた者が疑念を断じて、甘露を味わうのであるが、聚会〔の全員〕もまた〔甘露を〕味わうならば食物と飲物などのすべてが甘露になると言うのが要約した意味である⁽⁵⁶⁾。

ところで、『サマーヨーガ』には、「五甘露」という用語も、「五甘露」を指す一組になった人体の排泄物や人肉が説かれている箇所はどこにも見られない。これは『秘密集会』とは異なる『サマーヨーガ』の大きな特徴である。それにしても『サマーヨーガ』における「ソーマ飲料」（あるいは rasāyana）は、単に経血と精液という二者の混ぜ合わされたものではなく、大肉の有無は別にして、尿・糞便・経血・精液といった三昧耶の混合であって、内容的には「五甘露」に近いものと考えざるを得ない。

以上のように「ソーマ飲料」の実体を検討してきたが、ここで少し本筋から離れて、『サマーヨーガ』第六品および『チャクラサンヴァラ』第一品の集团的修法の核となっている「ソーマ飲料（rasāyana）摂取儀礼」と「四灌頂」体系の内の「秘密灌頂」について論じたい。無上瑜伽階梯において、秘密灌頂・般若智慧灌頂の核となっている儀礼は要約すれば、「性瑜伽による成就」のカテゴリーに属するものである。『真実撰経』の成立後の早い時期に始まったであろう仏教タントリズムの宗教的実践を論ずるに際して、この「性瑜伽による成就」しか考慮に入れないとすると、ここで述べた「飲食成就（口にすることによる成就）」は全く無視されるか、あるいはそれによって獲得される成就是世間的な悉地に認められことになるかのいずれかであろう。しかし、「飲食による成就」が多くのタントラに明記されているのは紛れもない事実である。また先に引用したように、「薬指と親指の先端でソーマ飲料の如くに味わうならば、常恒で無漏の智慧の成就が獲得される」のであって、獲得されるものはまさしく出世間の悉地である。

あるいはまた別に、「ソーマ飲料の摂取」儀礼を無理矢理に「性瑜伽による成就」のperspectiveに押し込んで捉えると、「五種三昧耶」の名で仏教タントリストの間で通用している五種類の人体の排泄物や大肉を、秘密灌頂の文脈に押し込めて、

「精液」と生理中の女性との性瑜伽の結果生じる「経血」との二種に限定するという無理な結果が生じてしまう。しかしこれまでの引用からも明らかなように、先ず「ソーマ飲料」(rasāyana)は精液と経血の二者のみの混合物ではない。さらに「ソーマ飲料」摂取の目的は、「(それを口にすることによって)不滅の悉地が得られる。一切諸仏を自性とするこのrasāyanaの樂によって金剛薩埵の寿命と若さと無病の最勝樂が成就する」というものであって、この金剛身の獲得はそれ自体が「飲食による成就」である。これはŚūraṅgavajra作 Abhidhānottaratantramūla-mūlavṛtti (Toh 1414)の次の文言からも理解される。

(適切に作られた「ソーマ飲料」を)人が飲ことによって、〈有〉の三摩地が得られるとの〔ヴェーダの〕喩えの如くに、五甘露を味わうならば、常恒なる無為法の悉地が獲得されるであろう。もし幻の如きものは證得しないとしても、不死にして長寿と無病となるのであり、世間のすべての悉地に入るのである。このようにソーマ飲料を幻のごとくに證得してから、マントラを十万〔反〕唱えて、曼荼羅をつくるのが相応しい⁽⁵⁷⁾。

こうして、「性瑜伽による成就」と「飲食による成就」の二つの成就の手段が併存する事態は、無上瑜伽階梯の阿闍梨たちにも十分認識されていた。彼らが起源と性質を異にする両者の会通を図っている方法は、『チャクラサンヴァラ』第一品の註釈から窺うことが出来る。以下はViravajra作 Padārtha-prakāśikā-nāma-śṛisamvara-mūlatantra-ṭīkā (Toh 1412以下、『サンヴァラ広釈句義明』)からの引用である。

このように聚輪を釈説してから、ソーマ飲料が説明される。即ち「蜂蜜と朱と樟腦を一緒にして梅檀と赤を混ぜ合わせたもの」と説かれていて、秘密灌頂の境界が〔味〕金剛女(〔Rasa〕vajrā)として示されているのである。それはまた何であるかといえば、蜂蜜であって尿と、朱であって〔経〕血と、樟腦であって菩提心(精液)と、赤であって大肉と、梅檀であって糞便とを準備した五肉と混ぜ合わせて等味となされたものである。

それを何処に置くかと言えば、「聚会の内に置くべし」と言われる。六十二人の尊格(瑜伽者)の中央で四つの頭蓋鉢の処である。それらの尊格たちはどのようなものであるかと言えば、「一切金剛の標幟を持つ」と説かれて、額に金剛鬘で

飾りつけているのである。どのように味わうかと言えば、「親指と薬指の尖端を結び合わせて」と説かれて、親指と薬指の二本を結び合わせ舌の上にラサを置くべきである。

どのように知ればソーマ飲料となるかと言えば、「瑜伽の知によって常に吟味するべし」と説かれていて、瑜伽の禪定の楽である。「知」とは舌根の直接知覚により四歓喜の区別を證得することであり、即ち五甘露のラサについて最初に生じる楽を自性とする歓喜と最勝歓喜と意の楽と俱生歓喜が生じた後で、グルの直接知覚によって他の対象のラサの空性を證得する瑜伽の直接知覚が生じることが「常に吟味するべし」と言うことであり、『サンブタ』の中でもまた、「識と智慧により、境の知を常に吟味すべし」と説かれている⁽⁵⁸⁾。

かくの如く聚輪を説いてからソーマ飲料の釈説は、「ヘールカ以外に他の瑜伽は無い」と説かれていて、金剛女尊者（味金剛女）について幻の如くに證得するのがヘールカについての瑜伽である⁽⁵⁹⁾。

この箇所のキーワードは「〔味〕金剛女」であって、即ち、「五甘露と五肉を混ぜ合わせて等味となされたもの」が「秘密灌頂の境界」として等置されている。この「飲食による成就」と「性瑜伽による成就」の両者の会通がこのような仕方で行われていることは、先に引用した『平等和合莊嚴』に出る「大香と香水と混ぜた菩提心と大朱であって、〔それに〕肉を混ぜ合わせた五甘露を自性とする威力を具えたものを頭蓋鉢に入れて、世尊・金剛薩埵の三昧耶である金剛女について、幻のごとくに證得する」の文言とも同一趣旨である。タントリストの阿闍梨たちは、真実在の色身である般若波羅蜜母との瑜伽を「食欲行」として、彼らの宗教的実践の根幹に置くのであって、この「食欲行」の思想を核としてそれまでの諸々の実践を体系化していく。Viravajraの見解によれば、『二儀軌』で確立した「四歓喜説」は「ソーマ飲料」の摂取を内容とする「飲食による成就」にも貫徹する基本概念となっており、「飲食による成就」が「秘密灌頂の境界」とリンクされることで「性瑜伽による成就」と統合されたものとして現れている。しかし、こうした見解は『理趣広経』「真言分」や『サマーヨーガ』第六品に出る「ソーマ飲料」摂取儀礼の原義ではないであろう。また一方で、「四歓喜説」は本来的には「性瑜伽による成就」と結びついた理論である。この阿闍梨たちの会通の仕方から逆に、「ソーマ飲料」摂取儀礼によって、「性瑜伽による成就」とは関係なく世間と出世間の悉地に入り得ることが可能であると信じられており、それを目的とした宗教実践が行われてい

たことが推測される。それは仏教徒たちが「秘密成就法」の秘策を展開した『真実撰経』成立の時期から始まり、不空の『十八会指帰』がカバーする八世紀中葉までの時期であるが、「飲食による成就」の思想はその後も途絶えることなく、仏教タントリストたちの集会における飲食の背後に常に存在したと考えられる。

さて本論に戻って、『サマーヨーガ』第六品に出る「ソーマ飲料の如くに味わうならば」の文言内で、「ソーマ飲料 somapāna」はその実体が明らかになった。次は「の如くに味わうならば」の文言を検討したい。ここでは当然、後期密教の阿闍梨たちが自らの三昧耶である「rasāyana (つまり五甘露) 摂取儀礼」をバラモン教のソーマ儀礼とどのように関係づけていたかが問題となる。再生族に出自を持つ阿闍梨たちにはバラモンが行う「ソーマ祭」の内容は常識だったのであろうか。タントラはそれについては何も述べていない。しかしいくつかの註釈書には「yajña (供犠)」についての言及が見られる。先ず『Bhavabhadraサンヴェラ釈』には以下のように説かれる。

「これについて疑念を為すべからず」とは「ソーマ飲料」云々などが説かれて、バラモンたちが供犠 (yajña) を為す時に、ソーマ樹の液を黄褐色をした家畜 (牛) の皮で揉んだものがソーマ飲料である。それによって寿命が延びさらに福德も増大する。バラモンたちが疑念無しにソーマを口にした如くに瑜伽者が五甘露を味わうならば悉地が獲得される⁽⁶⁰⁾。

『Bhavakīrtiサンヴェラ釈』には、以下のように説かれる。

「ソーマ飲料の如くに味わうならば」とは、阿闍梨 Dombi-paの御前は「供犠の時にバラモンが酒に依止する如くである」と主張しておられる。Konkanaの御前は「バラモンたちが供犠の時にソーマ飲料に依止する〔如く〕為すべし」と主張される⁽⁶¹⁾。

Jinabhadra作 Śricakrasaṃvaramūlatantrapāñjikā には次のようにある。

「ソーマ飲料」とは〔ソーマ祭での〕ソーマ飲料よりもこれが劣るものではなく、そうであるとしてもまさしくバラモンたちが供犠の時に極めて清浄と為してその飲物について受け取らせて、瑜伽の明知であると密意するのであり、そ

のようなマントラ行者によって悉地が獲得されるのである⁽⁶²⁾。

Viravajra作 Samantagaṇaśārīna-nāma-ṭikā では、以下の如くである。

「ソーマ飲料の如く」という意味は、「ソーマ飲料」は酒精飲料の如くにそれを口に出して語ることが相応しいのであり、バラモンたちによる供犠に際して、極めて清浄にされた飲物が特別なものとしてバラモンたちが執持する丁度そのようにと言う意味である。それについてこの密意は数がとても多く意味が多いからである。ソーマ飲料と類似したものにしてから、出来るだけ五種三昧耶と三昧耶の財などを特別に他の我慢を生起して、嫌悪〔感〕などを完全に断じて、甘露の飲物の如くに證得すれば、常恒の悉地が獲得されるのであり、大印契の悉地はこれによっても得られる⁽⁶³⁾。

『Śāśvatavajraサンヴェラ註』には以下の如く説かれている。

ソーマ飲料も世尊によって説かれたものが、外教徒たちの成就の手段となるのであって、血と一緒にした牛の皮でソーマをバリの如く見なした上で、丁度ソーマ飲料が罪過を克服して清浄と為す如くにこの場で酒が飲まれると言う意味である。外教徒たちの真実が最勝の輝きを具えた行為である⁽⁶⁴⁾。

前節で述べたように、「ソーマ」はバラモン教の「ソーマ祭」において中心となる「実体」である。ここで非正統派であった仏教徒たちはバラモンたちが大事にする「ソーマ飲料」を自らの集団的儀礼に組み込んでいると言える。問題は「ソーマ」の正体がブラーフマナ文献の時代に早くも不明となり、以来「ソーマ飲料」は様々な代替物で行われてきたという事実である。仏教徒たちの内で正統バラモンの教養を持つ阿闍梨たちがその経緯を知らなかったとは考えられない。彼らはそれを十二分に承知の上で、儀礼の正統な伝承者であるバラモンたちが嫌悪する自らの三昧耶(五甘露)を「ソーマ」と同置している。仏教徒たちの「ソーマ飲料」は、彼らがバラモンたちにとり重要な『ヴェーダ』起源の本来の「ソーマ」を換骨奪胎して「飲食による成就」儀礼の核に取り込んだものであると言える。しかしタントリストたちの集会で口にされる仏教徒流儀の「ソーマ飲料」が正統派バラモンたちに好感を与えたとは考え難い。

ところでこの聚会の中央に置かれた頭蓋鉢に入った「ソーマ飲料」に目される五甘露を摂取するについても、註釈書では二つの異なる理解が見られる。『Kambala サンヴァラ釈』は「無名指は大地に作り親指はメール山として結び合わせ」て取った甘露を先ずグルに献じ、続いてヘールカなどの諸仏、そして印契女に献じて、最後には自分が味わうとする。これはインド神話にでる乳海攪拌の物語に因んだ所作であり、プトゥンは「ヘールカの標幟である頭蓋鉢をその左手で持ち、右手でその内から取って、往時に須弥山で大海を攪拌して甘露が生じた如く、親指は大地、無名指は須弥山として結び合わせて攪拌した上でそれ（頭蓋鉢）から取って⁽⁶⁵⁾」と釈している。それとは違った性瑜伽に引きつけた解釈を『サンヴァラ広釈句義明』に見る。

『四座』の中で、「聚会の中央は身曼荼羅であり、金剛の標幟を持つとは交会であり、親指は秘密の金剛（男根）、薬指は蓮華（女陰）であり、その結合から生じた菩提心（精液）を瑜伽者が知ることがソーマ飲料である⁽⁶⁶⁾」と説かれる（後略）⁽⁶⁷⁾。

先の引用で見た如く、「ソーマ飲料の摂取儀礼」はバラモンたちのソーマ祭の核心部分を取り込んで仏教徒が行う儀礼である。それからすると頭蓋鉢に入った五甘露を親指と薬指で嘗めるのが本来の所作であろう。ところがここでも『Bhavakirti サンヴァラ釈』のように、「Kambalaの御前は屍林における聚輪の中央で金剛種姓の般若母と方便の交会によって置くべしと主張される」と釈されたり、この『サンヴァラ広釈句義明』の如くに、性瑜伽に会通する解釈も見られるのである。プトゥンはこの先の箇所でも本来の所作を未了義、「性瑜伽による成就」に引きつけた解釈を了義と述べている⁽⁶⁷⁾。この点からも、無上瑜伽階梯にあっては、「飲食による成就」と「性瑜伽による成就」が併存していること、およびその一方で、「ソーマ飲料の摂取儀礼」に対しても性瑜伽で一元的に解釈する傾向の存在が認められるのである。

結 語

以上の『サマーヨーガ』を中心にした「ソーマ飲料」についての論述から「飲食による成就」についていくつかの結論を出しておきたい。

先ず第一点は、『チャクラサンヴァラ』が「ソーマ飲料somapāna」イコール「五甘露pañcāmṛta」であるとして、『理趣広経』・『サマーヨーガ』以来の〈somapāna〉に一つの結論を出していることである。一方、註釈書は別にして、『サマーヨーガ』自身は〈somapāna〉を「一切諸仏を自性とするラサーヤナrasāyana」（不死の靈薬）であるとするが、同じく神々の不死の飲物である甘露の五種類を示す「五甘露」の用語は、全体を通して見いだせない。ここから〈somapāna〉と「五甘露」の両者は異なった経緯をもつ用語であった可能性が推測される。ともあれここで注目すべきことは、ソーマ飲料・ラサーヤナ・甘露の三者すべてが天上的な「口にする」存在であることである。

第二点は「ソーマ飲料」と無上瑜伽階梯の灌頂儀礼である秘密灌頂との対比から明らかになる事実である。秘密灌頂は、般若智慧灌頂・第四灌頂へと続くものであり、「性瑜伽による成就」と名づけることができる成就の手段である。それに対して「ソーマ飲料」の摂取は「性瑜伽による成就」という経緯を直接的には経ることなくとも、「ソーマ飲料」を口にすることで出世間の悉地（大印成就）と世間の悉地の双方を達成すると言うものであり、「飲食による成就」と名づけうる成就の手段である。

第三点は、〈白〉・〈大赤〉・〈赤梅檀〉などがそれ自体、金剛阿闍梨と印契女との性瑜伽から直接に生じた両者の体液の混合物にストレートに同置できないとするならば、この『サマーヨーガ』の段階では秘密灌頂以降の灌頂を含めた「四灌頂」体系は未だ成立を見ていなかったことになろう。つまり「飲食による成就」は「四灌頂」体系の成立に先行していることである。『秘密集会』第一品冒頭の文言に集約的表現をみる仏教タントリズムは「貪欲行」を修法の根幹に置くことで所謂「密教一般」から自らを別立していく。だが仏教タントリズム成立は「四灌頂」体系の整備と同時ではあり得ない。仏教タントリストは「貪欲行」を軸にしてそれまでのすべての宗教的実践を再度、体系化していく。この過程で「四灌頂」体系が確立されると考えられる。こうした動きとも関連してであろうか一部の阿闍梨は、『真実撰経』以後に模索され成立した『サマーヨーガ』に見る「飲食による成就」を「性瑜伽による成就」に強引に結びつけていく。これは「五甘露と五肉を混ぜ合わせて等味となされたもの」を「秘密灌頂の境界」と等置するという方法に見られるものである。

第四点は、しかしインド後期密教の修法は「性瑜伽による成就」に一元化されたわけではない。「性瑜伽による成就」の論理とは別に、「飲食による成就」の思想は生

き続けるのであり、その実践的表現が聚輪を始めとする仏教タントリストの儀礼の重要な構成部分となっていることである。穿った見方をすれば、人間的諸活動の全体に置いて「性瑜伽による成就」で一元的に説明しにくい部分が聚輪儀礼に流れ込んでいるとも言えよう。それに対して秘密灌頂以降の灌頂次第はまさに「性瑜伽による成就」の論理の産物である。

略号

『二儀軌』S本: Snellgrove, D.L. 1976(1959) *The Hevajra Tantra A Critical Study* London.

『秘密集会』松長梵本: 松長有慶 1978『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版

RBTS: Jagannatha, U.: 1986 *Vimalaprabhāṭikā* 11

SU津田本: Tsuda, Sh. 1974 *The Saṃvarodaya Tantra Selected Chapters* Tokyo.

Toh: デルゲ版西藏大蔵経

TTP: 北京版西藏大蔵経

参照文献

北村太道 1989『『Vajrasīkharatantra』における秘密成就法について』『密教学研究』No.21

桜井宗信 2001「Kriyāsaṃgraha所説のガナチャクラ儀礼」『智山学報』No.50

静 春樹 2002「ガナチャクラから見た仏教タントリズムの修道論(試論)」『京都精華大学紀要』

津田真一 1975「所謂Cakrasaṃvara-tantraの『輪供養儀軌品』その梵文テキスト並びに和訳」『豊山学報』No.20

1987『『ヘーヴァジュラ・タントラ』に於る真理の問題』『反密教学』リポート

辻直四郎訳 1978 (1970)『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫

森 雅秀 1995「インド密教におけるプラティシュター」『高野山大学密教文化研究所紀要』No.9

エリアーデ・M『エリアーデ著作集第十巻 ヨーガ②』(立川武蔵訳) 1975

Barstow, A. 1983 *The Prehistoric Goddess The Book of the GODDESS Past and Present*
Crossroad

Roerich 1976(1949) *Blue Annals* BANARSIDASS

註

(1) 本稿では取り上げることは出来ないが、Āryadeva作『行合集灯』の「戲論の行」は舞踏による「大印契の悉地」を保証している。(Rare Buddhist Texts Series 22 p.81)

(2) 「(知らずに)糞尿・精液を飲んだ場合」、バラモンなどの再生族は浄化儀礼と再入門式(punarupanayana)をしなければならない。(『Dharmasūtra』)

(3) 北村太道(1989:4)参照。

(4) 『秘密集会』松長梵本p.14(20)

(5) Toh 1785『灯作明』Ha. 167a2-3

bshang gci zhes bya ba la sogs pa la / bshang gci ni bdud rtsi lnga'o / sha chen zhes bya ba ni mar me rnam pa lnga ste / gnyis po de dag cha mnyam par byas nas / bza ba mar ngo'i tshes brgyad dam / bcu bzhi la ri lu byas la grib ma la bskams nas /

(6) 『秘密集会』松長梵本p.88 (24)

(7) Toh 1199 Ja.81a4-5

rnal 'byor cho ga bshad par bya ni mi'i lus la gnas pa'i bdu rtsi lnga'o / de ltar mdor bstan nas rgyas par bshad pa ni / bzhi mnyam ni bshang ba'i dwangs ma'o / gci ba ni dri chu'o / tsandan ni g'yul du bsad pa'i khrag go / ga pur ni khu ba'o / sa li ja ni sha chen no / sihla ni rang byung gi khrag go kunduru ni snyoms 'jug gi brda'o / kakkola ni padma'o / mu gu ni rkang ngo / de rnams sman ni chen po ste / zhes pa ni mi'i lus la gnas pa'i sman yin pas chen po zhes brdar btags pa'o /

(8) 『秘密集会』松長梵本p.122 (128)

(9) Toh 1198 Cha.62b5-7

khrag chen po ni rngul po / ga pur ni sha chen po'am rkang ngam mar ram bad kun sra ba'o / tsandan dmar po ni bshang ba ste lus dang sems rgas pa bskyed pas smin par byed pa'i phyir dang dga' bar byed pa'i phyir ro / rdo rje chu ni gci ba'o / sems las yang dag byung ni khu ba ste / 'dus pa phyi mar yang gsungs pa /

rang bzhin gyis lus chos rnams la // dri ma lnga yis rnam par mdzes //
yi shes lnga yis byin brlabs phyir // bdud rtsi lnga zhes bya bar bshad //
ces so / dam tshig ces pa bdud rtsi lnga'o /

(10) Toh 422 Ña.74b5-7 参照。

(11) 津田 (1987:136) 参照。

(12) Toh 1793 ch.4 Ki. 214a6-b2

bdud rtsi lnga zhes pa ni bshang ba la sogs pa rdzas lnga'o / dkyil 'khor gyi 'khor lo dbul lo zhes pa ni de'i cho ga 'di yin te / skyes ma thag pa'i bu chung gi sa la ma lhung ba'i bshang ba kham phor kha sbyar du gzhag la zhag bdun gyi bar du rang gi 'dod pa'i lha'i sngags dang rje btsun yi ge brgya pa dang lhan cig tu mngon par bzlas la grib ma la skam du bcug la / phyi nas dri bzang dang / shri kha ṅḍa dang / tsandan bsres nas btags te bsked pa'i rim pas rnam par snang mdzad kyi gzugs su bskyed la de yongs su gyur ba las slar yang de nyid rdzas su bsam par bya'o / de med na rang las byung ba'i mtha' mar gyur ba thigs pa gsum tsam blang bar bya ste / dang po byung ba'i rags pa'i dri ma ni blang bya ma yin pa'i phyir ro / de la byin gyis brlab pa'i rim pa ni snga ma bzhin du'o / dri chu yang tha ma nas byung ba'i thigs pa gsum tsam mi bskyod pa'i rnal 'byor gyis byin gyis brlabs te blang ngo / khrag kyang lo bcu gnyis lon pa'i bu mo'i rang byung ba'i me tog blang bar bya ste / med na g'yon pa'i srin lag nas byung ba'i

rin chen 'byung ldan gyi bskyed pa'i rim pas byin gyis brlabs nas blang ngo / byang
chub kyi sems kyang zla ba gzas zin pa'i dus su dbang po gnyis snyom par zhugs
pa las byung ba sa la ma ltung ba dung phor gyis blangs te gsum rdo rje'i rnal
'byor gyis byin gyis brlab pa'o /

(13) Toh 435 Ca.25b3-26a6 参照。

(14) Toh 1199 Viravajra 『sampaṭa所出広釈宝鬘』Ja.51b2-3

da ni mtha' gnyis dang bral ba'i ro nnam ston te / skye bo gzhan gyis bza' min
gang / zhes bya ba ni / bdud rtsi lnga dang sha lnga 'jig rten pa rnam kyis smod
pa'o /

(15) 『秘密集会』松長梵本p.41 (41-3)

(16) 『二儀軌』S本p.40 I kalpa ch.11 (9)-(11)

(17) Toh 1180 Ka.76a3-4

de la skyes bu'i ming gi dang po'i yi ge na'o / gang gi ba lang gi ming gi dang
po'i yi ge ga'o / ha ni glang po che'i ming gi dang po'i yi ge'o / shva ni rta'i
mtha' ma'i ming gi yi ge'o / de bzhin du shva ni khyi'i ming gi dang po'i yi ge'o
/ rdzas 'di rnam mnyam par byas la mthe bo'i tshigs mdud tsam gyi ril bu byas
te sbyang ba dang / spel ba dang / sbar ba dang bdud rtsir byas te zos pas phyi'i
dngos grub tu 'gyur la /

(18) Toh 1182 Ka.270b1-2

bza' ba gsungs pa / dam tshig ces bya ba la sogs pa ste / dam tshig ni lnga ste /
go ku da ha na'o / rgyal po'i sā lu zhes pa ni mi'i dam tshig dang rgyal po'i sā lu
dang / rus skyes zhes bya ba ni ming gi rnam grangs so /

(19) Toh 373 Kha.284b1-5

sha dang tshil dang de bzhin khrag // mkhas pa yis ni gzung bar bya //
sgrub po dngos grub 'dod pa yis // lcags kyu lnga ni ci rnyed pa'am //
'dir ni gsang ba gtsor bshad pas // ci ste yang dag rnyed na gzung //
ba lang sha dang rta sha dang // glang po'i sha yang de bzhin te //
mi yi sha dang khyi yi sha // mkhas pa yis ni gzung bar bya //
rdo rje sems dpa' gang gsungs pa'i // sgron ma lnga zhes grags pa'o //
rnyed nas tshes bcu'i dus su ni // dngos po 'di dag yang dag bsdu //
dri zhim pa dang bsres nas ni // rab tu gsang ste sbyar bar bya //
sgrub pa po yis gsang ba yis // ril bu'i rnam pa yang dag bya //
de yi mod la yongs rdzogs pa'i // bza' dang btung ba'i khyad par gyis //
tshogs kyi dbus su byin brlabs nas // phyi nas las ni yang dag brtsam //
sngags bzlas de bzhin bsam gtan dang // 'dod pa kun gyi 'bras 'byung zhing //
lus kyi bcud kyis len dang ni' // mchog tu grol ba'i dngos grub ster //
las rnam kun la rab sbyar na // mkha' spyod go 'phang 'thob par 'gyur //

(20) Toh 428 Na.199b2-4

de nas mchod pa'i khyad par las // rung dang mi rung rnam par spang //

lcags kyu la sogs rnam pa lnga // de nyid lnga ru bya ba ste //
 lcags kyu che la dgod pa ni // ye shes lhar ni 'dod pa ste //
 rdo rje lcags kyur mi bskyod pa // gnas kyi lcags kyu rin chen dbang //
 rgal po'i lcags kyur don yod grub // g'yo ba'i lcags kyur 'od dpag med //
 lcags kyu lnga la sogs pa la // de nyid thams cad sbyar bar bya //

(21) タントラでは、gnas kyi lcags kyuとなっている。

(22) Toh 1608 Ya. 28a7-b3

lcags kyu chen po zhes bya ba / zhes pa ni mi'i sha'o / ye shes lnga' zhes pa ni /
 de'i rang bzhin nyid du 'dod pa'i don to / rdo rje lcags kyu mi 'khrugs pa / zhes
 pa ni glang po che'i sha'o / mi bskyod pa'i rang bzhin zhes pa'o / yum gyi lcags
 kyu rin che ldan / zhes pa ni khyi sha ste rin chen 'byung ldan gyi rang bzhin no
 / rgyal ba'i lcags kyu don yod pa / zhes pa ni glang gi sha ste / don yod grub pa'i
 rang bzhin no / g'yo ba'i lcags kyu 'od dpag med / ces pa ni rta'i sha ste 'od dpag
 med kyi rang bzhin no /
 lcags kyu lnga la sogs pa yi // thams cad de nyid rab tu sbyar //
 zhes pa ni de la thams cad de nyid ces pa ni / mya ngan las 'das pa ste / de sbyar
 ba ni rkyen zhes pa'i don to / de dag yang rnam par snang mdzad dang / mi bskyod
 pa dang / rin chen 'byung ldan dang / 'od dpag med dang / don yod grub pa'i
 rang bzhin du gsungs pa / gang zhig 'dod pa'i lha kun dang / zhes pa ste sangs
 rgyas lnga'i rang bzhin nyid kyi phyr 'dod pa sgrub po /

(23) Toh 1412 Ma.358a7-b2

dang po snod gcig tu za ba tshogs kyi 'khor lo bsten pa'i rdzas dang / dbugs 'byung
 byang chub kyi sems dang / bar ma rang byung gi khrag dang / mchog sha chen
 po dang / dri ni bshang ba dang po'i chu ni gci ba dang / bcas pa ni rta dang gla-
 ng po dang khyi dang ba lang dang mi sha ste lnga'o / de Om āḥ hūm gsum gyis
 byin gyis brlabs nas rigs lnga'i dang bzhin can gyis ro rdo rje mar bskyed pa'o /

(24) RBTS 11 p.120

evaṃ viṇmūtramajjā pañcapradipā aṣṭasamayāḥ, dvau candrādityau / evaṃ daśa-
 vidhā pūjā pañcāmṛtaiḥ pañcapradipair bhavati gaṇacakra iti madyamāṃsa-
 maithunāmṛtabhakṣaṇam iti samayacatuṣṭayam kartavyam ācāryena / anyathā
 māravṇdair gṛhyata iti tathāgataniyamah // 148 //

(25) Toh 1231 Ņa.43b1

mgron rnam dga' bar bya ba'i phyr // de la sha dang chang dag dang //
 'bras chan la du khur ba dang // de bzhin bza' dang bca' ba dang //
 btung dang de bzhin bldag dang myang // 'jig rten pa yi 'byor pa yis //
 tshogs ni 'byor tshad sta gon bya //

(26) Toh 3305 Bu.215b6 参照。

(27) Toh 3140 Phu. 58b3-4

de'i rjes la 'khyil ba bzlas pa'i dūr ba'i chun pos zangs snod na gnas pa'i zho

dang / 'o ma dang / mar dang / sbrang rtsi dang / bye ma ka ra bsres pa'i ngo
bo'i phyi'i bdud rtsi lnga rnam dang / de nas 'o ma dang / zho dang / mar dang
/ ba'i lci ba dang / chu dang / ba'i rnam pa lngas sku gzugs bkrur rung ba / Om
hūm trāṃ hriḥ āḥ zhes pa'i sngags kyis byug par bya'o /

(28) Toh 366 Ka.184b5-6

ga pur tsandan dmar po dang // sbyar ba khrag chen yin par bshad //
tshogs kyi dbus su bzhag pa dpal // thams cad ldang ba'i ra sa yin //

(29) Toh, PTT共にgzhanであるが、ch.2では、「金剛薩埵の吉祥なる寿命とlang tshoと無病の最勝樂が成就する」とあり、『サマーヨーガ』を引用した『行合集灯』にはsiddhyet śriva-jrasattvāyuryauvanārogyasatsukhamとskt.が回収出来ることから、この箇所はgzhonであるべきでありtib.訳の単純ミスとしか考えられない。

(30) Toh 366 Ka.160a2-5

mi yi mtshal ni grub pa la // dmar chen po zhes bya bar bshad //
ngo bo nyid kyi mthu dag dang // rang bzhin gyis ni de grub pa'o //
rdo rje'i chu dang rdo rjer bcas // mtshal chen po dag bsgrub pa ni //
mthu yis rab tu grub pa ste // padma'i snod kyi nang du bzhag //
chags pa chen po bcom ldan 'das // rdo rje sems dpa' de bzhin gshegs //
sangs rgyas kun gyi rdo rje'i thugs // dam tshig 'di ni 'da' bar dka' //
de yi mtshal dang khu ba dang // mtshal chen po ni bsgrub pa dag //
chags pa chen po las byung bas // dmar chen po zhes bar bshad //
dmar chen dang ni ga pur bcas // tsandan dmar por sbyar ba dag //
tshogs kyi dbus su bzhag pa ni // ra sa ya na kun slong ba //
rang gi lha yi sbyar ldan pas // srin lag dang ni mthe bo'i rtses //
zhi ba'i btung ba bzhin myangs na // rtag pa yi ni dngos grub thob //
sangs rgyas kun gyi bdag nyid kyi // ra sa ya na bde ba 'dis //
rdo rje sems dpa'i tshe dang gzhon // nad med pa dang bde mchog 'grub //

(31) Toh 488 Ta.237b1-3.

de nas 'dir slob ma gzhug pa'i cho ga rgyas pa ni /
byang chub sems ni bla med pa // mchog tu bskyed par byas nas ni //
gar byas spyi bor thal sbyar mchod // slob ma thams cad gzhug par bya //
ci 'dod pa yi dngos grub bskyed // slob ma me tog dor du gzhug //
rnal 'byor ma ni gang la babs // de dang de yi lha mo 'grub //
de nas gdong g'yogs bkrol nas ni // rnam pa kun tu yon blangs nas //
rdo rje padma'i dbang bskur gyis // dam tshig gsum ni gsal bar sbyin //

(32) Toh 366 Ka. 162a6-7

dmar chen po dang ga pur bcas // tsandan dmar po sbyar ba rnam //
tshogs kyi dbus su bzhag pa la // g'yon pa mtshan 'dzin rdo rje bcas //
rang gi lha yi rnal 'byor ldan // srin lag dang ni mthe bong rtses //
zhi ba'i btung ba bzhin myangs na // rtag pa'i dngos grub thob par 'gyur //

sangs rgyas thams cad mnyam sbyar ba'i // mkha' 'gro sgyu ma'i tshogs kyis
kyang //

rgyas mi thebs shing mi rmongs te // de la gnod par mi 'gyur ro //

(33) Toh 1660 Ra.406b1-3.

de ji ltar myang snyam na / rdo rje chu dang rdo rjer bcas / zhes gsungs te /
dri chen dri chu bcas pas / byang chub sems dpa' dang mtshal chen po ste sha dang
bcas pa'i bdud rtsi lnga rang bzhin gyi mthus nus pa dang ldan pa thod pa'i snod
du bzhag nas bcom ldan 'das rdo rje sems dpa'i dam tshig rdo rje ma la sgyu ma
lta bur rtogs pa yin no / de ni gang zag gcig gis ma yin par / rnal 'byor pa thams
cad kyis myang bar bya'o /

(34) Toh 1660 Ra.406b3-4

zhi ba'i btung ba bstan pa ni / de yi mtshal dang khu ba dang / zhes gsungs te /
mtshal ni rang byung gi me tog go / khu ba ni sa bon no / mtshal chen po sgrub
pa ni bdud rtsi sgrub pa'o / ci'i phyir na / bdud rtsi lnga la mtshal chen po / zhes
khyad par gyi ming gang gis gdags shes na / bde ba stong pa nyid bsgoms pa'i
chags pa chen po las byung bas na dmar chen zhes bshad do /

(35) Toh 1660 Ra. 406b4-6.

de'i byang chub sems dang / tsandan dmar po ste sha chen bcas pa tshogs kyi
dbus su bzhag pas lha thams cad kyis myang ba'i ra sa ya na shi ba slong ba zhes
bya bar 'gyur ro / ji ltar myong zhes na / rang gi lha yi sbyar ldan pa / zhes
gsungs te / tshogs kyi 'khor lo'i rnal 'byor pa rnams kyis rang rang gi lha'i rnal
'byir dang ldan pas srin lag dang / mthe bo'i rtse mos zhi ba'i btung ba bzhin
myangs na rtag par zag med kyi yi shes kyi dngos grub thob par 'gyur ro /

(36) Toh 366 Ka.162b5-6

slob ma dam pas de phyin chad // phyag rgya'i ye shes rjes bzung nas //
rnam par snang mdzad mchog bzhin du // sangs rgyas kun gyis bdag nyid grub //

(37) Toh 488 Ta.238a5

de nas ro dang bza' dang spyod pa gar dang glu / rol mo'i mchod pa sogs kyis
mgon la mchod / phul ba de yis rdo rje bla ma che / dad pas bdag dang gzhan
rnams mchod par bya /

(38) Toh 488 Ta.238a1-5

de nas rnal 'byor mchog gi dam tshig ni /
khrag chen ga pur dang bcas pa // tsandan dmar dang sbyar ba ni //
tshogs kyi nang du rab zhugs nas // rdo rje dang bcas rdo rje 'dzin //
srin lag mthe bo rtse mo yis // nam mkha' thams cad sbyar mchog ldan //
zla ba'i btung ba bzhin myangs na // rtag pa'i dngos grub thob par 'gyur //
'dod pa kun la longs spyod cing // ci 'dod pa ni bsten bzhin du //
nam mkha' kun mchog sbyar ba yis // dngos grub thams cad thob par 'gyur //
nam mkha' kun mchog sbyar ba yis // nam mkha' thams cad ces brjod cing //

rdo rje'i phyag rgyas btab pa yi // 'jig rten gsum yang bza' bar bya //
 dngos grub las dang de bzhin bde // 'di la cung zad mi 'grub med //
 las kyi tshogs kyi dngos grub kyis // dngos grub ma lus sgrub par 'gyur //
 don yod mchog tu grub pa dang // gdug pa thams cad gnop par byed //
 sdug bsngal kun 'phrog dpal dang ldan // rnal 'byor 'di ni las kun byed //
 ces bya ba mchog tu gsang ba bcom ldan 'das rdo rje sems dpas gsungs so /

(39) Toh 366 Ka.183a3-4

dpal gyi tshig dang ldan par brjod // slob ma dkyil 'khor btsud nas kyang //
 yon gyi mchog dag blangs nas ni // rdo rje ming gi dbang bskur bas //
 de bzhin gshegs par de lung bstan // phyag rgya'i sbyar ba 'di dag gis //
 byang chub snying po'i bar du ni // rdo rje'i ming du rab tu gnas //

(40) Toh 368 Ka. 213b7-214a1. 参照。

(41) 津田(1975:106) 参照。

madhurakṭam sakarpūraṃ raktacandanayojitam /
 gaṇamadhye pratiṣṭhaṃ tu sarvocchiṣṭarasāyanam //
 sarvavajrāṅkacihnāgrakaram aṅgulidhāryatām /
 anāmāṅguṣṭhavaktrābhyāṃ lehayed yogavit sadā //
 somapāne vadāsvādyā siddhim āpnoti śāśvatim /
 問題のタームsomaはSU津田本 ch.26にも現れる。
 kṣīrasāgaranāmaṅ ca vahate gṛhṭamadhūpamā /
 somapānan tu sā kanyā dehe vajravairocanaṁ sthitā / (9)

(42) 辻(1978:102) 参照。

(43) R.G.ワッソンは『聖なるキノコ・ソーマ』(1988)の中で、ソーマは「ベニテングダケ」であるとして、多くの学者を巻き込んでなされてきた「ソーマの正体」論争に一石を投じた。ワッソンの見解はユーラシア大陸北部に見られるシャーマニズムとアリアンの遭遇にまでも拡がるものである。

(44) Toh 366 Ka. 153a7-b1

sangs rgyas kun gyi bdag nyid kyi // ra sa ya na bde ba 'dis //
 rdo rje sems dpa' dpal tshes dang // lang tsho nad med bde mchog 'grub //

(45) Toh 366 Ka. 185a7

lha mo kun la bde 'jug pa // sbyar ba kun la mos pa ni //
 kun tu sangs rgyas kun gyi bdag // ra sa ya na bde bar bshad //

(46) Eliade(1975:125) 参照。

(47) 津田(1975:106) 参照。

(48) Toh 1401 Ba.5b6-6a1 参照。

sbrang rtsi ni sbrang rtsi chen po'o / khrag ni me tog go / ga pur bcas zhes bya
 ba ni ga pur dang lhan cig par yon pa'i me tog ste / mi phyed pa'i rim pas so /
 tsandan dmar po ni sha'o / sbyar zhes bya ba ni bshang ba la sogs pa dang bcas
 pas mnyam med drug po bcud kyis len no / rdo rje mtshan ma ni chos kyi 'byung

gnas las byung ba'o / yang na thams cad rdo rje ni bcom ldan 'das he ru ka yin la / de'i mtshan ma ni thod pa'o / 'dzin pa ni de la rang gi lag pas blang bar bya ba ste / ming med ni sa gzhir byas la / mthe bo ni ri rab tu sbyar bar bya ba'o /

(49) Toh 1403 Ba.155a1-2

(sogs kyi sgras ni) bdud rtsi lnga ba bza' ba dang tshogs kyi 'khor lor zla ba'i btung ba bzhin du bdud rtsi lnga myang ba dang / dbang po gnyis kyi sbyar ba dang / (後略)

(50) Toh 1403 Ba.160a3-5

sbrang rtsi dang chos mthun pas sbrang rtsi ni sa bon te / yang dag par sbyar bas skyon gsum 'joms pas brdar byas pa nyid kyi phyir ro / khrag ni rab tu grags pa'o / ga pur ni bde bas 'grengs pas na ga pur te yi ge dang lung nyams par byas pas grub po / de yang sha'o / dmar byed pas na khrag ni dri chu'o / tsandan ni dga' bar byed pas na snang mdzad do /

(51) Toh 1404 Ba.250b6-7

khrag chen ga pur bcas pa dang // tsandan dmar po dang sbyar ba // tshogs kyi nang du zhugs pa na // thams cad bcud kyis len du gnas // zhes bya ba ni khrag chen ni rang byung me tog go / ga pur dang bcas pa ni byang chub sems dang bcas pa'o / tsandan dmar po ni sha che no /

(52) Toh 1405 Ma.9a4-6

sbrang rtsi ni khu ba'o / mtshal ni khrag go / ga pur bcas zhes bya ba ni sha chen dang bcas pa'o / dmar dang zhes bya ba ni gci ba'o / tsandan zhes bya ba ni bshang ba'o / tshogs kyi nang du zhes bya ba ni 'khor lo gsum gyi dbus su'o / bzhag pa zhes bya ba ni nyams su blangs pa'i zhes ko nika na'i zhal snga nas bzhed do / ka mba la zhal snga nas kyis ni dur khrud du tshogs kyi 'khor lo'i dbus su rdo rje rigs la sogs pa'i shes rab dang thabs kyi sbyar bas gzhang par bya'o zhes 'dod do /

(53) Toh 1407 Ma.73b1-3

sbrang rtsi ni mar chen po'o / khrag ces pa ni me tog go / ga pur bcas zhes pa ni ga pur dang lhan cig bsres pa 'di ni me tog ste / rim par dbye ba med pas so / dmar dang tsandan sbyar ba dag / ces pa la / dmar dang tsandan ni sha'o / sbyar ba dag ces pa ni bshang ba la sogs pa dang lhan cig par bdud rtsi ro mchog drug pa dpag tu med pa'o /

(54) Toh 1410 Ma.266b5-6

de nas gzhan yang rab 'chad byed // phyi rol bdud rtsi lnga mdzes pa // sbrang rtsi khrag dang ga pur bcas // tsandan dmar po dang sbyar ba // tshogs kyi dbus su rab bzhugs ni // thams cad rdor mtshan mtshan ma 'dzin // zhes pa bdud rtsi lnga bza' ba nges par bstan to / sbrang rtsi ni rkang ngo / khrag ni rdul lo / ga pur ni khu ba'o / tsandan dmar po ni bshang ba'o / tshogs kyi dbus su rab zhugs ni gci ba'o /

(55) Toh 1410 Ma.267a7-b2

da ni tshogs kyi 'khor lor zhi ba'i btung ba rgyas par 'chad do zhes /
 ming med mthe bong gdong dang gis // rnal 'byor rig pas bza' bar bya //
 zhi ba'i btung ba bzhin myangs pas // dngos grub rtag pa thob par 'gyur //
 zhes sbyangs pa'i chang gis gtso bo la drug skyes kyi sngags kyis yang dag par
 tshim par bya zhing bdag nyid tshim par bya'o / bshad pa'i rgyud du yang /
 dang por bla ma la phul nas // de ma thag tu sangs rgyas rnam //
 de mthar phyag rgya la byin nas // zhi ba'i btung ba bzhin du myang //
 zhes so /

(56) Toh 1403 Ba.160b3-4

sbrang rtsi la sogs pas ci brjod ce na / bcu phyed ces pa ni bdud rtsi rnam pa
 lnga rnam gcig tu byas pa ni bdud rtsi lnga'o / lha'i rnal 'byor dang ldan pas
 the tshom spangs te bdud rtsi myang ba'i tshogs yang myangs na bza' ba dang
 btung ba la sogs pa thams cad bdud rtsir 'gyur ro zhes pa ni bsdu pa'i don to /

(57) Toh 1414 Tsa. 214a4-6.

gang zag gis 'thung pas srid pa'i ting nge 'dzin thob pa'i dpe de bzhin du / bdud
 rtsi lnga myangs na dngos grub rtag pa 'dus ma byas 'thob par 'gyur ro /
 gal te sgyu ma lta bu ma rtogs na mi 'chi bar tshe ring ba dang nad med par
 'gyur te / 'jig rten gyi dngos grub thams cad la 'jug go / de ltar zhi ba'i btung ba
 sgyu ma lta bar rtogs nas sngags 'bum bzlas nas dkyil 'khor byar rung /

(58) Toh 1412 Ma.360b6-361a4.

de ltar tshogs kyi 'khor lo bshad nas / zhi ba'i btung ba bshad par bya ste /
 sbrang rtsi mtshal dang ga pur bcas // tsandan dmar du sbyar ba ni //
 zhes bya ba gsungs te gsang ba'i dbang bskur ba'i yul rdo rje mar ston pa yin
 no / de yang gang zhe na sbrang rtsi ste gci ba dang / mtshal te rang byung dang
 / ga pur te byang chub sems dang / dmar te sha chen po dang / tsandan te bshang
 ba dang sbyar ba'i sha lnga dang bsres nas ro mnyam par bya pa'o / de gang du
 gzhag par ba zhes gsungs te (P. de gang du bzhag ce na / tshogs kyi nang du bzhag
 par bya zhes gsungs te) / lha drug cu rtsa gnyis kyi dbus thob pa bzhi'i gnas su'o
 / lha de rnam ji lta bu zhe na / thams cad rdo rje'i mtshan ma 'dzin // zhes bya
 ba gsungs te / dpral bar rdo rje'i phreng bas brgyan pa'o / de ltar myang bar bya
 zhe na / sbom po mtha' lhag rtse sbyar bas // zhes bya ba gsungs te / mthe bong
 dang srin lag gnyis kyis rtse'i steng du ro gzhag par bya'o / ji ltar shes pas zhi
 ba'i btung bar 'gyur zhe na / rnal 'byor rig pas rtag tu dpyad // ces bya ba gsugs
 te / rnal 'byor bsam gtan gyi bde ba'o / rig pa ni lce'i dbang po'i mngon sum
 gyis dga' ba bzhi'i bye brag rtogs pa dang / de yang bdud rtsi lnga'i ro la dang
 por skyes pa'i bde ba'i rang bzhin dga' dang / mchog dga' yid bde ba / lhan cig
 skye dga' skyes pa'i rjes la bla ma'i mngon sum gyis gzhan don gyi ro'i stong pa
 nyid rtogs pa rnal 'byor gyi mngon sum skyes pa ni rtag tu dpyad ces bya ba yin

- te / kha sbyor las yang /
 rnam shes dang ni ye shes kyis // yul gyi rig pa rtag tu dpyad // ces bya ba gsungs
 so / de ltar na lce'i dbang po'i mngon sum dang / rnal 'byor gyi mngon sum gyi
 rang bzhin brgyad cu dang bral ba'i ro'i stong pa nyid nyams su myang ba ni zhi
 ba'i btung ba zhes bya'o /
- (59) Toh 1412 Ma.403a6
 de ltar tshogs kyi 'khor lo bshad nas zhi ba'i btung ba bshad pa ni /
 he ru ka las sbyar gzhan med //
 ces bya ba gsungs te / rdo rje rje ma sgyur ma lta bur rtogs pa ni he ru ka la
 sbyar ba'o /
- (60) Toh 1403 Ba.160a7-b2
 'dir the tshom mi'bya'o / zhes pa ni zla ba'i btung ba zhes bya ba la sogs pa
 gsungs te / bram ze rnams mchod sbyin byed pa'i dus su zla ba'i shing gi khu ba
 phyugs dmar ser gyi pags pa dang mnyes pa ni zla ba'i btung ba'o / de yis tshe
 rgyas pa yang bsod nams 'phel lo / ji ltar bram ze rnams the tshom med par zla
 ba 'thungs te / de bzhin du rnal 'byor pas bdud rtsi lnga myangs na dngos grub
 thob par 'gyur ro /
- (61) Toh 1405 Ma.9b3-4
 zhi ba'i btung ba bzhin mnyams na / zhes bya ba ni slob dpon Do mbi pa'i zhal
 snga nas kyi mchod sbyin gyi dus su bram ze chang bsten pa lta bur ro zhe 'dod
 do / Ko nka na'i zhal snga nas ni bram ze rnams kyi mchod sbyin gyi dus su zhi
 ba'i btung ba bsten par bya zhes 'dod do /
- (62) Toh 1406 Ma.46a4-5
 zhi ba'i btung ba zhes bya ba ni bzhi ba'i btung ba las 'di dman pa ma yin te / de
 lta mod kyi ji ltar bram ze dag mchod sbyin gyi dus su shin tu dag byed du
 btung ba de la len par byed de / rnal 'byor rig pa zhes bya bar dgongs te / de lta
 bu'i sngags pas dngos grub thob par 'gyur ro /
- (63) Toh 1408 Ma.170a7-b2
 zhi ba'i btung ba bzhin zhes bya ba'i don ni zhi ba'i btung ba ni chang gi btung ba
 bzhin du de nyid tshig tu brjod par rigs te / 'on kyang bram ze rnams kyis
 mchod sbyin pa'i dus su shin tu dag byed du gyur ba'i btung ba'i khyad par can
 du bram ze rnams kyis 'dzin te de lta bu zhes bya ba'i don to / de la 'di'i dgongs
 pa ni grangs las 'das shing don mang ba nyid kyi phyr ro / zhi ba'i btung ba dang
 'dra bar byas nas ji ltar nus par bdud rtsi rnam pa lnga dang dam tshig gi rdzas
 la sogs pa khyad par gzhan nga rgyal skyes pa smod pa la sogs pa yongs su spangs
 te / bdud rtsi'i btung ba lta bur yongs su brtags na rtag pa'i dngos grub 'thob ste
 / phyag rgya chen po'i dngos grub 'di yis kyang thob po /
- (64) Toh 1410 Ma.267b2-4
 zhi ba'i btung ba yang bcom ldan 'das kyis gsungs pa mu stegs pa rnams kyi

sgrub pa'i phyogs rnams la 'gyur te / khrag dang bcas pa'i ba lang gi pags par so
ma ba li zhes pa bzhin du nye bar 'jal ba la ji ltar zhi ba'i btung ba sdig pa 'joms
shing dag par byed pa de bzhin du 'dir chang 'thung pa'o zhes pa'i don to / mu
stegs pa rnams kyi de nyid mchog tu gzi brjid can nyid las so /

(65) Toh 5044 Tome6. 110b7-111a1 参照。

(66) 筆者はこの引用箇所を『四座』の中に見い出せない。

(67) Toh 1412 Ma.361a5-6

gdan bzi las tshogs kyi dbus ni lus kyi dkyil 'khor yin la rdo rje'i mtshams 'dzin
pa ni kha sbyar ba yin la / sbom po ni gsang ba'i rdo rje srin lag ni padma de
sbyar ba las byung ba'i byang chub sems rnal 'byor pas rig pa ni zhi ba'i btung
ba yin ni zhes gsungs te /

(68) Toh 5044 Tome6 110b6-111a6 参照。

<キーワード> ガナチャクラ 五甘露 ソーマ飲料 rasāyana 仏教タントリズム